

周辺からの記憶 13

～2013 年度福島・シンポジウム～

村本邦子（立命館大学）

2016 年 10 月 21 日、東京で全国婦人相談員連絡協議会があり、「熊本地震と婦人相談の記録～相談員へのヒアリングから」の報告をした。被災状況によって状況は違うが、全般的傾向として、震災直後は相談数が一時的に減り、1 ヶ月後から急増、とくに離婚相談と DV 相談、アルコール・ギャンブル依存が増えたようだ。被災による経済的困窮や住居問題も多く、今後も増えるだろうと予測されている。子どもへの影響も大きく、精神不調や不登校などの問題が増えている。失業や生活困窮によるストレスの予先が相談員に向かうこともあった。他方、地震による避難をきっかけに問題の解決へ一歩踏み出すケースがあったり、被災による仕事の変化によって新たな連携が生まれたりなど肯定的変化も報告された。災害時だからこそ行うべき特別な支援アプローチがある。日常からの備えが重要であり、災害時の相談マニュアルと体制作りが必要だということで、全国婦人相談員連絡協議会では、それにこれから取り組むそうだ。11 月 14 日現在、熊本では、震度 4 以上の地震が 140 回も続いている。「今後に備え、知見を蓄積していきましょう」と報告をした直後、鳥取地震の速報が飛び込んできた。

11 月の岩手でのプロジェクトでは、台風 10 号の爪痕をあちこちに見ることになった。水に浸かったのは大震災の時と同じで、フラッシュバックする人がいたり、「ようやくここまで立ち上がってやってきたのに、また降り出しに戻るのか」と、大震災の時より精神的ダメージが大きいとおっしゃる方もあった。そして、今度はまた福島で地震だ。いったいいつになったら安心できるのだろう。

12 月には福島に行く。今年は、「クリスマスカレンダーを作ろう」のプログラムの事前申し込みがあつという間に 80 人を超え、満員御礼となった。来年の全国婦人相談員連絡協議会は福島だが、時期大会長は、福島での 2011 年のこのプログラムに子連れで参加してくれていたのだと言う。何というご縁だろう。まさに、禍福は糾える縄のごとしだ。



3 年目福島

<福島入り>

2013 年年 12 月 1 日から、福島市市民活動支援センター「チェンバおおまち」にて 1 週間の漫画展、そして、12 月 7・8 日の週末を使って、支援者支援セミナー、みんなで楽しく劇遊び、クリスマスカレンダーをつくろう、風船で遊ぼう、団士郎の漫画トークを実施する。毎年、同じ流れである。

金曜に福島入りし、夕方、ロビー集合。教職員 6 人、院生 3 名、修了生 2 名の総勢 11 名。チェンバおおまちへ行って、皆で会場設営とプログラムの準備をし、中華料理屋に行き、珈琲専門店へ行く、これも例年の流れ。福島駅前には、クリスマスの点灯式イベントをやっていたが、閑散としていて何だか寂しい夜だった。

土曜の朝、会場へ向かうと、駐車場に「除染中」の看板がかかっており、除染作業をしていた。どんなふうに除染がなされるのだろうと見てみたが、アスファルトの表面を機械で水洗いし、小さな芝生の草むしりをしているだけである。こんな原始的な作業で本当に除染できるのだろうか。地元の人たちに聞くと、家の瓦なども手作業でふき取っているそうだ。機械だと放射能が舞い上がって空中に拡散するが、手でやると確かに線量は下がるという。それにしても、手で放射線をふき取って大丈夫なのだろうか。除染作業員と話したメンバーによれば、水圧で放射線を浮かして吸い取り、安全なアルミでくるんで土に戻しているという。「放射能の体への影響は 30 年後くらいに出るそうだが、60 代の自分には関係ないが、20 代

の若者も働いている」と言っていたそうだ。何ともやりきれない。



<支援者支援セミナー>

支援者支援セミナーは 9 人のグループだったが、子育てや介護など、家族が日常的に抱える問題が話題になった。震災や放射線による負荷の下で、たとえば、認知症の進行が早くなったり、癌の発見や治療が遅れたり、本来は日常の問題だったものが大変になっているようだった。先の見通しが持てないなかで家族は揺れており、自主避難

をしたが、結局は離婚になったりする。離婚は日常にもあるが、震災の影響で増えている。家族同士でも言葉にしない、できないつらさがある。そこをどう支えていけるかと、支援者たちも悩んでいた。

仮設住宅では、最初は賠償問題がメインだったが、今ではご近所問題。出ていく人もいれば、取り残されていく人の気持ちもある。避難してきたひとつの家族のなかでも、街の生活にすっかり慣れて戻りたくないという子ども世代と、早く元の家に戻りたい祖父母世代。街に馴染めず不登校になる子もいる。大人も同じで、街中で孤立する人もいれば、しがらみから解放されてのびのびしている人もいる。

「おかげで子どもが楽しめる企画がたくさんある。子どもには経過を話している。子どももそれをよく理解し、感謝して生き生きとしている」「失ったからこそ大切さに気づくことがある」という声とともに、「私たちは、いつまで支援されなければならないの？これまで支援する側だったのに」「支援される側になるとはどういうことなのか。話さなければならないが、誰を信頼して、どこまで話せばいいのか」という声もあった。誰からとなく、前提を共有していない人たちにイチから説明しなければならないことのストレスが話された。先の見えないなかで、支援者たちも揺れていた。

確かにその通りだ。毎年、福島に来ると、テレビや新聞にたくさんの情報が出ているが、関西にいと、ほとんど福島の情報が入らない。事前に皆で勉強してから現地入りするものの、やはり現地に来て教えてもらわなければわからないことがたくさんある。それでは支援されているのか、教えている

のかわからないという気分にもなるだろう。このプロジェクトには、「支援」という言葉を使いたくなくて、「応援」プロジェクトと名づけたが、「支援者支援」という言葉は、対人援助学のひとつのキーワードとして以前から使っていたので、違和感なく使っていた。福島の閉塞感や苛立ちをひしひしと感じるとともに、今後のあり方を考える必要があると思った。



<クリスマスカレンダーを作ろう>

カレンダーづくりには、9人の子どもと6人のお母さんが来てくれた。「材料をたくさん用意しましたので、よろしければ一緒にどうぞ」「子どもさんにはスタッフがきますので大丈夫ですよ」と言うと、お母さんたちも楽しそうに参加してくれた。子どもより数の多い大人たちが、片時も目を離さず、子どもたちを守るように囲むなかで、カレンダーづくりが行われた初年度の光景を思い出しながら、お母さんたちもほんの少し気を緩めて自分のことができるようになったのだと思った。日常の子育て支援の場のようなだった。子どもも大人も、それぞれに工夫を凝らした素敵なカレンダーを作り上げ、互いに褒め合った後、修了生のアイディアで、その場で写真を撮ってプレゼントした。

実は、子どもたちの5人は、昨年も参加してくれていて、「今年はいつかな？いつかな？」と楽しみにして、チラシを待っていていたということだった。1年経って、みんな少しずつ成長していた。昨年、相談にのったお母さんにも、その後の経過を聴くことができた。継続するからこそ喜びだ。



＜交流会で＞

夜はビーンズ福島との交流会で、福島の話聞かせて頂いた。3月まで保育士をされていたスタッフの話では、原発事故以後、

保育を再開させるまで、自分たちでしなければならなかったことがたくさんあって、本当に大変だったそうだ。園庭や建物の外側の除染は公的に行われたが、遊具や玄関については、自分たちですべて削らねばならなかった。エアコンも外気が入るタイプのものは使えないので、すべて入れ替えた。園庭の木も、枝分かれしたところは線量が高いので、線量が下がらない木は伐採した。先生方は、放射線についての知識を得るために、保育の合間に交代で研修に出かけたそうだ。今でも、毎日の放射線はもちろん、給食に使う材料も線量を測って保護者に知らせ、窓の近くは線量が高いので、子どもが近づかないように気をつけるなど、多くの配慮をしながら保育をしている。

保護者にもいろいろな考えがあり、父親と母親とで放射線に対する意見が違う家庭もある。学校の給食についても、以前はご飯を持ってきて下さいと言っていた学校でも、最近はお飯を持参するか給食を食べるかを親の判断にゆだねたり、自宅からご飯を持ってくることを禁止したりしているところもある。プールも学校の管理職判断に任せられており、実施するところ、しないところがある。実施する場合には、今度は親の判断によって、子どもを入れるか入れないか決めなければならない。心配で学校に相談したことがわかると、噂話の対象になったり、親の考えでご飯を持参した子どもが、給食を食べている子どもたちから変な目で見られたりすることもあるという。

ビーンズ福島では、自主避難者を対象に、「ママカフェ」を行っている。東京でのママカフェは人数が少なかった。東京に転居した人たちが、福島のことを忘れない、福島出

身だということを内緒にしているなどの要因が考えられたという。活動をしていくなかで、少しずつニーズも変わってきて、母子のケアだけでなく、父たちが思いを語り合える「パパカフェ」も始めた。長期に渡り、週末に母子の元に通うしんどさ、母が避難先で定着してしまい（仕事を始めてしまうなど）、「もう妻と子どもは戻ってこないのではないか」と不安になってしまうこと、母子からの疎外感など。男性スタッフが入り、木曜の晩に行っている（金曜の晩から母子の元に行く父親が多い）。

家の庭でとれた柿を祖父は孫に食べさせたいが、食べさせたくない親と、間にはさまれる孫。同じ家族の食卓で、県内産のものを食べる父と、食べない母子。聞けば聞くほど悲しい気持ちになったが、それは紛れもない福島の今だ。



<反省会>

日曜は10時半から12時まで、漫画トークと風船で遊ぼうのプログラム。子どもは風船プログラムへ、親はトークへという家族もあった。皆で片づけをして来年に向けた反省会をする。ビーンズ福島の中鉢さんから、「盛りだくさんで、こちらの意図が福島の人に届かないのではないか。支援者たちは支援されるより、むしろ状況を伝えたいと思っている。福島を支援するというより、福島のことを学び、一緒に考えて欲しい」

い。院生たちは一日早く来て、支援機関を事前に見学してはどうか」との提案がある。支援者支援セミナーで聞いた声と合わせて、来年はそんなふうにしようと思う。

＜福島街角で＞

プログラムを終え、福島駅に向かうと、クリスマスのイルミネーションの光景とは打って変わって、駅前通りが封鎖され、電気自動車のモーターショーが繰り広げられていた。たくさんの人だかりで、派手な格好をしたキャンペーンガールたちがにこやかに人々を誘い、どこか昔描かれていた未来都市に似た雰囲気が漂っていた。

さらに行くと、駅前で、黒ずくめの服を着た若い男が拡声器を手に、声をあげて演説していた。「誰も戦争に行きたい人はいない。それでも行かなければならないのだ。大東亜戦争においても、アメリカや中国や韓国がずるいことをするから・・・」何を主張しているのだろうかと思いを傾けてみたが、どう聞いても奇妙な論理だった。後には、サンタのドレスを着たきれいな若い女が大きな日の丸を持って立っていた。男の演説が終わると、女も「私たちのおじいちゃん、おばあちゃんの苦勞を思ってください。それで今の日本があります」と演説を始めた。道行く人々は、怪訝そうな顔つきで眺めては通り去っていたが、モーターショーと街宣の組み合わせが何ともシュールに感じられた。

帰ってから検索してみると、この日は12月8日で、1941年、日本が真珠湾攻撃をして、アメリカとイギリスに宣戦布告をした日だった。街宣の若者たちは、朝、靖国神社を参拝してきたらしい。この日は、他にも、1953年、アイゼンハワー米大統領が国連総

会で原子力の平和利用を提言した日、ジョン・レノンが射殺された日、1995年、福井県の高速増殖炉「もんじゅ」でナトリウム漏洩事故発生した日だったことを知る。暗澹たる気分になった。街宣の若者たちの気持ち少しわかったような気がした。

2014年シンポジウム

＜サービスラーニングの観点から3年を振り返る＞

毎年、1年のまとめとしてシンポジウムを企画しているが、2014年2月18日、「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは？～東日本大震災から3年の支援を振り返る」というタイトルでシンポジウムを開催した。午前の部では「サービスラーニングの観点から」として、3名の院生、木下大輔さん（臨床心理領域M1）、奥野景子さん（対人援助領域M2）、清武愛流さん（対人援助領域M2）がそれぞれの体験と学びを報告し、山口洋典さん（立命館大学サービスラーニングセンター副センター長）からコメントをもらった。

山口さんは、ディビッド・コルブの体験学習の循環過程、すなわち、「積極的な挑戦（する）→確かな経験（感じる）→省察的な所見（見つめる）→抽象的な概念（考える）→積極的な挑戦（する）・・・」という循環過程に照らし合わせながら、院生たちの報告を位置づけ、本プロジェクトがどのようにサービスラーニングとして機能しているかを評してくれた。院生たちが、それぞれのスタートラインから始めて、経

験、省察、抽象化を経て、また新しいスタートラインに立っていることがよく見えたように思う。



午後の部では、「東日本大震災から3年の支援を振り返る」として、被災地で支援

活動が続けてこられたゲストを招き、それぞれの活動について紹介してもらうとともに、現地では、どの時期にどのような支援が求められてきたのか、今後のニーズはどう変化していくのかなどについて話題提供してもらった。以下、メモ風に記述していく。

＜女性支援の現場から＞

最初のゲストは八幡悦子さん（NPO法人ハーティ仙台・代表理事）で、「宮城における女性支援の視点から」というテーマで報告してもらった。八幡さんは助産師で、みやぎジョネット代表として被災地女性支援に関わっていた。ハーティ仙台は、DVや性暴力など被害女性をサポートする団体だが、震災直後、各地避難所を訪問したという。避難所には更衣室や授乳室もなく、プライバシーが保護されていないこと、避難所運営において少数派の意見が無視されることが際立っていた。民主的に意見を出せるシステムが必要だし、無料電話相談の広報が大事。確実に女性に渡り必要があるが、女性の下着配布に広報カードを同封する配り方が有効だったそう。避難所で女性対象の女性による面接調査が必要だが、面接員は直接生活支援者とは別人にすべきであるということだった。

現在、宮城県のDVや性暴力の問題は深刻化している。2012年、宮城県警へのストーカー相談は985件と過去最多。DV相談も前年比33%増で1856件。2013年1～6月のストーカーとDVの相談件数は、過去最多を更新した。ストーカーの相談は前年同期より35件多い508件。DV相談は76件増の941件。相談が増えるのはよいこと

だと思う、広報の効果が出ている、電話相談員の対応が的を射ているから警察まで届けるのだと考える。DV の殺人事件は、2011 年に 2 件、2012 年に 1 件と連続して起きてしまった。DV 相談等の活動増加に対応するため、被災地支援は代表を交替してもらい、2012 年度よりハーティ仙台は、後方支援に回った。

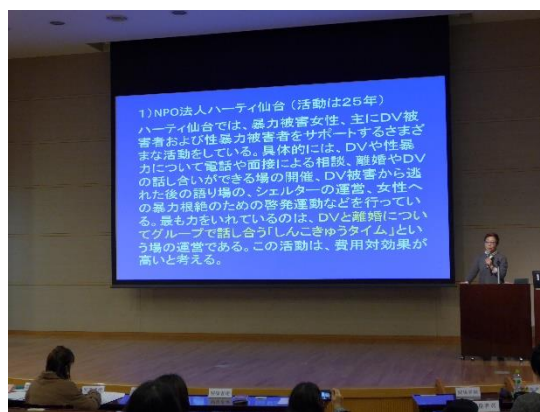
仙台市・宮城県と連携し、相談、啓発、研修を行ってきたが、2013 年からは、県の委託で、被災地における DV 被害者等のサポート講座を県内 7 カ所で開催している。ハーティのスタッフ 4~5 人で週に 1~2 回遠出することで、地方の相談担当者と顔が見える関係ができ、参加した当事者の劇的な展開も次々に起きているようだ。足を運べば、何かが変わることをつかんだ。

もともとDVはあった。そこに震災が影響して激化している。性暴力は、震災など関係なく、常に起きている。発覚するのは氷山の一角。弔慰金が世帯主に一括で支払われるから、離婚に際し、女性の貧困問題を起こしている。失業、一時的なお金が入る、しかし先に希望がまだ見えない、生活環境の激変で孤立・・・などの理由で、アルコール依存、買い物依存、パチンコやギャンブル依存が増加している。失業保険も切れ、弔慰金などの手持ち金も枯渇して、経済状態が悪化、DVはより深刻化している。仮設暮らしの過酷さから頑張って新築したが、収入の減少、ローンの重さに疲弊してくる。女性の雇用状況は厳しく、セクシュアル・ハラスメントが起こる。震災で家族を亡くした女性の一人暮らしや、心細い母子家庭に対して、セクシュアル・ハラスメントやストーカー事件が起きている。

ボランティア、NPO活動者による性暴力、被災者間の性暴力もある。

地方に根強い男尊女卑、家父長制の強烈な弊害。行政や福祉分野の人にも、人権教育がまだまだ浸透していないし、公的相談や支援の広報が不足している。それに対して、民間の商業主義の情報は強力である。

「ピンチをチャンスに！今後も災害をバネに、人権教育の普及を推し進めたい」と締めくくられた。『女たちが動く～東日本大震災と男女共同参画視点の支援』（みやぎの女性支援を記録する会編著 生活思想社）を参照のこと。



<子ども・若者支援の現場から>

福島での受け入れ窓口にもなってくれている中鉢博之さん (NPO 法人ビーンズふく

しま)からは、「福島における子ども・若者支援の視点から」というテーマで話題提供してもらった。中鉢さんは、2001年より福島市でフリースクールの設立に関わり、震災後は仮設住宅における子ども支援や「子どものこころのケア」事業担当として、支援者支援や専門職派遣なども行っている。

震災から3年近く経過した現在でも、14万人を超える福島県民が避難生活を余儀なくされている(2013年10月現在)。そのうち子ども(18歳未満)は、福島県内13,332人、福島県外15,816人、計29,148人であり、ふるさとを離れて仮設住宅やみなし仮設住宅で生活をせざるをえない子どもはかなりの数に上る。自主避難の多い市町村は、福島、郡山、いわき市の順で、県外避難は母子の割合が高い。震災から2年目は、もともと復興ステージの踊り場となる時期(変化があまりなく、避難生活が続くとの意味)だったが、福島の場合は、帰還の見通しの無さ、避難区域再編の遅れ、除染の遅れなどによって、2013年度も同じ状況が続いている。復興公営住宅の建設も遅れ、帰還のためのインフラ整備も進んでいないことから、来年度以降も、仮設住宅での生活はさらに長引く見込みである。

避難して仮設住宅で暮らす子どもたちは、度重なる避難生活、転校、交友関係の断絶、親の失業、同居家族の分断などの環境変化を受け、ストレスや問題行動が増えている。母親たちは、依然として高い放射線量と二重生活による経済的負担を抱え、「この生活がいつまで続くのか」「自分の選択が果たして正しかったのか」と、長期化する避難生活の中で自分の判断に自信が

持てず、自己肯定感が持てなくなっている。

支援者や親から上がってきた声をまとめると、①安心して存分に遊べる機会が少なくなったことによる子どもたちの体力低下や肥満 ②子どもたちの落ち着きの無さや言葉の荒れ ③チャイルドラインに寄せられる子どもからの電話相談で、人間関係による悩みの比率が被災地で高く、とくに福島は岩手や宮城より高い ④県外避難世帯への支援不足、自主避難者には経済的負担の問題が大きい ⑤母子(父子)のみの避難による家族の分断と別居の長期化、放射能に対する考え方の違いから家族間での軋轢が生じてきている ⑥ひとり親世帯の急増 ⑦子育て支援事業の不足 ⑧移動手段を持たない親は、子どもの遊び場や支援の場まで行けない ⑨避難生活の中での生じる大人同士の人間関係の悪化(両親の不仲、DV、近隣住民同士の諍い等)が子ども同士の関係にも影響する ⑩慣れない土地で生活再建に追われる保護者によるネグレクト ⑪親の経済的困窮による子どもへの影響 ⑫放射線への不安から子どもの行動を管理せざるを得ない状況にある保護者の負担 ⑬イベント型の支援による遊びの提供等が多く行われることにより、子どもが与えられることに馴れ、主体となって行動するという自主性が損なわれてしまう心配がある ⑭支援が入りやすい地域と入りにくい地域の格差 ⑮原発事故に伴い発生した「被災者」「被災地」に対する差別の問題がある。

ビーンズ福島では、県外避難者への支援として、避難生活へのストレスケア、母親同士の交流会、子育て支援の情報提供を目

的に、避難先から戻ってきた母子への支援「ままカフェ」を、6月から福島と郡山で、12月からは白川といわきでスタートした。また、福島県内の仮設住宅等で避難生活をしている子どもたちへの支援として、県北の仮設3か所(福島と二本松)と県中の仮設4か所(富岡町と川内村)で放課後学習支援や子ども広場の活動を続けている。走り回って落ち着かなかった子どもたちが集中できるようになり、子ども同士につながりができ、表情がよくなった。中長期の子ども支援が必要だが、震災後の緊急期を過ぎた後、支援は少なくなった。イベント型ではなく、避難生活の中での生活課題の解決や不安の解消につながる寄り添い型の支援が求められている。子育て、教育、心のケア等に対しての一定の専門性が必要。親・家庭・地域が子どもを支えていく力を取り戻すこと、一方的な支援だけでなく、避難者の自立や主体性の回復が重要だと考える。

本当の復興は、子どもがその地域で育ち、次世代に地域の継承がなされるようになることである。除染が進んで放射線量が低減しない限り、子どもを元の町で育てることは難しいと考える親や若い世代が多い。復興への道筋をしっかりと示しながら、子どもを持つ親世代や若い世代が希望を失わないような支援、つながり、文化を保ち続けられるような支援が必要。仮設住宅等で生活する子どもが、見通しが持てないことからあきらめてしまわないように、これまでの社会がつくってきた課題(原発事故)を子どもだけに背負わせないようにするには、国をはじめ、社会全体のサポートがまだまだ必要だと力説された。



＜岩手の子ども支援＞

次に、「岩手における子ども支援の視点から」として、山本克彦さん(一般社団法人子どものエンパワメントいわて・代表理事/岩手県立大学准教授)と八重樫綾子さん(NPO 法人いわて GINGA-NET 代表)が岩手での子ども支援について報告してくれた。

山本さんは、震災時、フィリピンで学生たちと井戸掘りボランティアをしていたという。3月17日に帰国し、岩手県の災害ボランティアセンターをどう立ち上げるかということを経験に、沿岸部を視察した。自然災害は、子どもに危機的状況をもたらす。2004年、中越地震の時も少し関わったが、家屋のほか、地域の学校、幼稚園、保育所、児童館、公民館、あらゆる居場所が無くなってしまふ。今回の大震災では、いろんな出会いがあって、2011年10月17日「一般社団法人子どものエンパワメントいわて」を立ち上げることになった。信頼できる機関がないかという外からの問い合わせに対して、一般社団法人をとった。

イーパッチという略称で活動しているが、震災当初、世界中からさまざまな団体や人が支援を申し出てくれて、その資源と豊富

なネットワークを現地の支援につなげるという役目を果たすことにした。後で紹介するギンガネットもそのひとつ。ユニセフやセーブザチルドレンなど多くの国際 NGO が入ってくれたが、メリット、デメリットがある。資金もあり、それぞれのノウハウで一気に活動を展開するが、避難所のなかにシートを払って、「子どものための遊びをやるから、ここには入らないでね」とか、「何だよ、時期的には早いんじゃないかな」とか正直あったりして、言い方を変えれば、頃合いを見て、地域の文化とのすり合わせをして、地域の子ども支援団体との調整や準備などもあった上で動くべきだと思う。

イーパッチが考える被災地支援とは、十年後の大人である子どもをエンパワーして、地域の復興の力をつくること。学校の空教室、仮設住宅の空き場所や公民館などを借りて、沿岸部約 20 ヶ所で、「学びの部屋」という形で居場所機能を持つ学習支援も行っている。自分たちの企画を持ちこむのではなく、ちょっと困ったなというニーズがあったら、出かけて行って、話を聞いて、その場所の支援を作るようにしている。今は、支援されるばかりでなく、自分たちも役に立ちたいという声に応え、少年野球チームが内陸部の雪かきを手伝いに行ったり、被災して再建したパン屋さんに子どもたちのパン焼き教室を提供してもらったりということも行っているということだった。

八重樫さんは当時、岩手県立大学の学生で、学生ボランティアセンターで活動していた。ちょうど 4 年生になる前の春休みだったが、被災地ボランティアに行くことは前提で、仲間たちと、いつ、どのような形で被災地に入るのがいいのかと構想を始めて、



1 週間後に被災地に行った。初期、全国の学生ボランティアセンターは、被災地支援に行きたいが、現地の状況がわからず躊躇していた。でも、被災地にはたくさんのボランティアが必要。それで、受け入れ機能が果たせたらと、最初の夏休み、千人の大学生を受け入れた。住田の公民館を借り、大学生のベースキャンプにして、寝泊まりなど生活のお世話をし、沿岸部へのボランティアバスを運行させた。以後、冬休み、春休み、夏休みと、学生の長期休暇期間の受け入れをやってきた。

最初の 1 ヶ月、釜石のボランティアセンターの窓口で、学生ボランティアたちと、全国各地から来たボランティアの受付、避難所と炊き出しボランティアのマッチングなどしていた。その頃、毎朝欠かさずボランテ

ィアに関わってくれていた子どもたちの姿があった。学校がずっと休みで、公衆トイレの掃除をやってくれていた高校野球部の子どもたちの姿。その後、姿が見えなくなっていったが、本当は、そうした姿を地域に見てもらい、お疲れさまと声掛けがあるような地域のつながりができていたらよかったなと振り返って思う。4月になると、県外の学生ボランティアたちも動き出し、ユニセフのイベントを手伝った。遊びだけでなく、子どもや親が顔を合わせ、交流する機会にもなった。

5月になると、大学が始まり、週末を利用しての活動となった。生活支援が中心になり、応急仮設住宅でのコミュニティ形成支援として、サロン活動を始めた。支援物資が多く集められたなかに、おむつや子どもたちのものも多くあった。おむつが欲しいという声に、他にも必要な人がいるだろうから届けたいが、自分たちだけでは届け先がわからないという時に、子どもたちに相談したら、子どもたちが学生ボランティアの手をひいて、「あそこに赤ちゃんいるよ」「おじいちゃんいるよ」と連れて行ってくれるようになった。子どもたちはよく見ていて、よく知っている。ちょっと仕掛けで、子どもたちの力を引き出すことも体験から学んだ。

「お茶っこ」と呼ばれるサロン活動も、初めは持ち込み型で、ボランティアが「ようこそおいでください」というスタンスだったが、その場を住民の場にするということで、子どもたちの力を借りた。子どもたちがちらしを配り、声をかけてくれると、少しずつ地域の人が集まってくれる。子どもの人をつなぐ力をみきわめること大事だなと学ん

だ。子どもたちの力が発揮されることが未来を作ることになる。未来に想像力を持つこと、先を読む力を今後も活かしていきたいということだった。

＜臨床心理士としての活動を振り返る＞

次は、臨床心理士の河野暁子さんの報告だった。河野さんは昔からの私の友人で、2005年から2011年まで国境なき医師団で活動し、パレスチナ、イエメンに派遣されていた。東日本大震災時、帰国していたこともあって、直後より東北に派遣され、2011年3月から6月まで、宮城県南三陸町と岩手県宮古市田老で活動し、そのまま東北に残ることを決め、2011年10月から2012年3月まで、千葉大学こころのケアチームとして一関市で活動した。

震災発生からの1年、臨床心理士だからできたこと、臨床心理士でないとできないこと、臨床心理士に期待されたことを考えてみた。震災直後は、海外からの心理専門家が「被災地でのケアの方法を教えてください」、あるいは、カルト集団が「カウンセラーです。こころのケアを行います」と入り込んだ地域もあった。災害直後のディブリーフィングが有害だということや自殺のリスクのアセスメントなど専門知識が必要なこともあるし、被災地に一人ボランティアで入って「こころのケア」をやるわけにはいかない。少なくとも臨床心理士という資格があることで、組織に所属することができた。活動の中で、臨床心理士としての視点で関わることができたと思う。避難所で被災地、被災者を元気づけようというイベントが多かった中、無理に元気づける関わり方をせず、被災者がくつろげる場、被災者同士が語



れる場を用意した。話をしたい方には耳を傾けた。

とは言え、臨床心理士でないとできないことはないのではないかとも思う。実際、震災直後は誰でも「こころのケア」を名乗って、被災地に入っていくことができた。ていねいに傾聴することを心掛けたが、傾聴ボランティアとの違いは何だろうと思ったこともある。傾聴する際に専門知識を持っているかどうかだろうか。

臨床心理士に期待されたことは、震災関連以外の課題も手伝ってほしいということだった。2つの考え方があり、①被災地・被災者のための支援なのだから、それ以外の相談は断ってよい ②地域から信頼されるには、最初から震災関連以外の相談は受け付けませんという態度ではよくない。本来は地域の社会資源が担っていた役割なのだと思うが、「こころの専門家」が来たから、あれもこれもお願いしようと、様々な相談が持ち込まれた。大切だったことは、被災地・被災者に「今」必要なことは何かを考えること、現地の自治体の思いを尊重すること。地域のメンタルヘルスについて取り組

んでいる自治体保健師との連携はとても大事なことだった。活動終了の際、現地が必要としている物は現地に引き継いでいかなければならない。

2012年4月からは、大船渡地域こころのケアセンターに勤務し、大船渡、陸前高田、住田で活動している。外部から来た臨床心理士だった自分が、地域に暮らす人となった。地域のある保健師が、「5年後には住民同士が自由に語って、互いに支え合っていけるようになってほしい」ということで、地域の傾聴ボランティアやゲートキーパーの養成研修を始めた。元々の社会資源が被害を受けているので、そこをサポートする。例としては、講師を担当できる人材不足を補い、徐々に地域の者が講師をやっているように。

研修に参加する方々の喪失体験が大きいので、「大変な状況の中、地域のためにがんばってくださっている」とねぎらうと、涙を流す方々もいる。被災者や遺族のために拓かれるサロンのような場には人が集まらないが、研修等でグループになると、必ず震災の話題になる。「故人を知っている人と話したい」「同じ境遇の人と話したい」「誰とも話したくない」「他の遺族の話は聞きたくない」「見知らぬ第三者と話したい」「口寄せで気持ちが楽になった」など、誰と話したいかは人それぞれ。

個別訪問で、自治体が実施するスクリーニングや健康調査のための個別訪問を続けている。「家族を亡くした辛さは、同じ立場の者でないとわかりません」と、玄関先で拒否する方もあれば、招き入れてくれて、「初めて話せます。来てもらってよかったです」と言ってくれる方もある。「話

を聴いてもらえてよかった」「あんたたちのおかげだ」と言ってもらうと、支援者として少しは役に立てているのかなと思うが、「あなたたちに話しても、この気持ちはわかりません」と言われると、申し訳ないと、こちらの感情が揺さぶられることの繰り返し。ペアで活動することの大切さを感じる。

震災以来、自分の時計が止まってしまったような感覚があった。これまで経験した海外での活動は一定期間活動すれば、自分の世界に帰れた。今はまだまだ帰れないと感じる。かなり意識して休暇を取るようになった。最近、地域での連絡会議の回数が減り、参加者も減ってきた。「こうやって復興していくんだよね」と言った人もあるが、「本当に復興なのか、風化ではないのか」と思った。実際、被災地以外との隔たりをますます感じる。テレビでは東京オリンピック開催が決まりましたと盛り上がっていたが、自分が暮らすアパートの外は、高台移転のための土をようやく切り崩しているところで、建築業者も足りないし、人も足りない。今後のことが心配になる。

＜京都における支援＞

最後は、野池雅人さん（特定非営利活動法人きょうと NPO センター常務理事・事務局長）から「避難者支援、支援者支援の経験から」というテーマで話題提供してもらった。きょうと NPO センターでは、まず、京都からボランティアを送った。災害ボラン

ティアセンターを京都駅に設置し、そこを拠点に 1 年間ボランティアバスを出し続け、500 人のボランティアを送った。その後は、本来の NPO の支援センターとして、現地与専門機関をつなぐ役割を果たし、支援団体の悩みに対する講座を開催した。

次に、民間のお金を必要なところにうまく届けたいということで、京都でやっていた地域創造基金を宮城に持っていき、地域創造基金宮城を作った。これは、民間の資金循環の仕組みとして、3 年間で 9 億円が集まった。つなぶろ基金というのを作り、京都の市民から集められた資金を現地で活動している機関に届けた。それから、京都の避難者のための雇用創出を行っている。多くが母子での生活のため、フルタイムでない形で働きたいという希望が多く、当センターでも 3 名雇用して働いてもらっている。最近では、支援される場所をたくさん作っても、来る人が減っている。いかに日常生活の場面につなぎ手を増やしくかが今後の課題だと思っている。



これで 3 年目の活動が無事終了した。